

フランス語の条件法とロマンス諸語における対応形式の対照研究

2023年4月15日 (於青山学院大学)

日本フランス語学会第342回例会

渡邊淳也 (東京大学)

本発表は、フランス語の条件法現在形・条件法過去形と、フランス語以外のおもなロマンス諸語においてそれらに対応する形式についての対照研究である。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語、英語の7言語対訳の平行コーパスを用いて調査した対応関係を観察するとともに、その結果に対する分析を行なう。

まず各言語で、本発表の調査範囲にどのような形式がみられたかを提示する。つぎにコーパス調査の統計的な結果を示す。そして、フランス語の条件法現在形とロマンス諸語における対応形式、フランス語の条件法過去形とロマンス諸語における対応形式という順で、コーパスから採取された例文に即して言語間での対比を検討してゆく。

結論として、ロマンス諸語との対照を手がかりとすることで、フランス語の条件法の意味のひろがりや照らし出すことができた。

とくに、他のロマンス諸語ではそろって条件法を用いないところで、フランス語のみで条件法を用いている例は数多く、フランス語においては条件法の使用が独自の論理にもとづいていることが明らかになった。フランス語で条件法が用いられるのは、広い意味での「言説の他者性」がみとめられる場合であり、その際、他のロマンス諸語で対応する形式は直説法であることが多かった。

また、フランス語で条件法の使用が多いことのもうひとつの要因として、他のロマンス諸語と比較した場合のフランス語での接続法の使用範囲の狭さ、そして未来諸時制の使用範囲の狭さがあげられる。フランス語では条件文での接続法の使用が他のロマンス諸語との比較においてたいへん少ない。そして未来諸時制、とりわけ他の言語では推論用法を広くに有する単純未来形が、現代フランス語では未来時の指示に特化しており、不確実性の標示は条件法の領分になっている。

このような点は、コーパスにもとづく対照研究を遂行することによってこそ知ることができるものである。今後も同様の研究を推進してゆきたい。